

巻頭言

「時間の埒外にある人間であれば、未来のなにを怖れることがあるう？」

(ブルースト「見出された時」I)

二〇一五年に、私は大学や学会とは異なる日仏会館ならではのオリジナル企画を作ろうと考えました。専門分野の垣根を取り払い、文化の豊かな交流の諸相を浮かび上がらせる、「芸術照応の魅惑」という総合テーマを掲げたシンポジウムを立ち上げたのです。そのときは、「近代パリにおける文学、美術、音楽の交差」というタイトルで、十九世紀後半から二十世紀初頭のパリを舞台にした諸芸術の交流について、二日間の充実したシンポジウムを行うことができました。その後、「芸術照応の魅惑」の名を冠したシンポジウムはシリーズ化され、二〇一六年には澤田直氏の企画で「芸術照応の魅惑Ⅱ——両大戦間期のパリ…シュルレアリスム、黒人芸術、大衆文化」が開催され、さらに二〇一七年には三浦信孝氏の企画で「ヴァレリーにおける詩と芸術」が実施されました。それらの充実した成果は書籍化されています。

そして、第四回目に当たる二〇二一年のシンポジウムのテーマは「ブルースト——文学と諸芸術」となりました。二〇一五年に最初の企画を思いついたとき、今後もしも個人の芸術家を対象として企画する場合、十九世紀ならばシャルル・ボードレー、二十世紀ならばブルーストこそがもっとも相応しい人物であろうと想像してい

たのを覚えています。文学、美術、音楽、舞台芸術のすべてを含み込んだ『失われた時を求めて』こそ、二十世紀を代表する芸術家小説であることは、あらためて言うまでもないことでしょう。小説家ベルゴット、画家エルスチール、作曲家ヴァントユイユ、女優ラ・ベルマなど、小説の具体的な登場人物のことも思い起こされます。

このすこぶる魅力的なテーマをシンポジウムの形で実現するに当たり、適切なオルガナイザーが必要なのは当然です。そこでお願したのは、京都大学名誉教授吉川一義氏でした。日本を代表するブルースト研究者であり、とりわけブルーストと美術について優れた研究を成し遂げられている吉川教授こそが、最高の組織者、学術責任者であることはここで強調するまでもありません。吉川教授は日本とフランスの優れた研究者はもとより、ブルーストに興味をお持ちの作家の方にもご参加いただくよう配慮して下さいました。専門性と一般性を合わせ持つ真に開かれたプログラムを構想し、形にして下さったのです。日仏会館の担当者として深く御礼申し上げます。

ということで、東京日仏会館は国際シンポジウム「ブルースト——文学と諸芸術」を二〇二二年五月十五—十六日に開催いたしました。このシンポジウムは本来、一年前の二〇二〇年五月に実施する予定でしたが、新型コロナウイルスの感染状況拡大のために延期を余儀なくされ、この二日間に挙行する運びとなったのです。対面ではなくオンラインで開催することになったのは心残りでしたが、日本の登壇者の方々はもとより、来日されるはずであったフランスの研究者の方々も、インターネットを通じて遠方より快くご協力下さいました。結果は大盛況で、各方面から高い評価をいただいたことは、主催者として望外の喜びとなりました。発表者、参加者の皆さまに心より感謝申し上げる次第です。

私自身は近代フランス美術の研究者ですが、プログラムの多彩なテーマと興味深い発表に胸躍らせ、聞き入ったことを今でも思い出しますし、その貴重な成果がこうして書籍としてまとまったことに言い知れぬ達成感を覚えていきます。とはいえ、この読書体験はシンポジウムの記憶の単なる反復ではありません。あらためてブルース

トの芸術世界が文字言語を通して開示されようとしている。そんな予感を密やかに覚えつつ、頁をめくるのを心待ちにしている次第です。

三浦篤

(東京大学教授、日仏会館常務理事)